

## ブエゲネルの地殻移動説

伊藤貞市

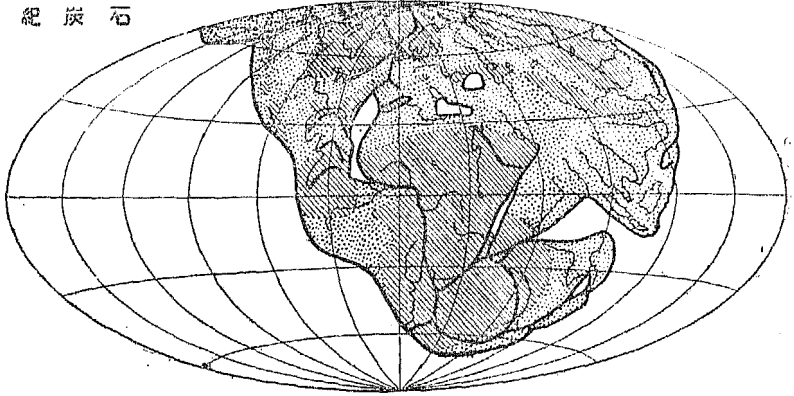
世界地圖を開いて見るとき、特にその大西洋の周邊部に注意すると奇妙なる對岸地形の照應を見出すであらう。乃ち一方の凸なる所は他の方で凹となり兩者をひきよせるとほとんど完全にすぎまなく縫合するやうな形をしてゐる。この事實よりブエゲネルは一つの新しい地殻構造論に考へつた。創唱以來十年漸く學界の俎上にのせられ近來、是非の論。旺なるウエゲネルの地殻移動説である。

彼によれば今の陸塊はもと一體であつて南米と南阿は白堊紀に至つて兩分し、段々相距つて行き北半はもと歐洲に密着しニューフワウランド、愛蘭及び北方のグリーンランドと塊をなしてゐたが、第三紀の末期又は北よりの方面では第四紀に至つてはじめて割目が出來相

離るゝにいたつた。又南極大陸、濠州、印度、本土はジュラ紀の初め迄は南阿南米と共に一大大陸であつたが、その後段々割目が出來て散り／＼に離れて行つた。印度は今よりも長い陸塊であつたが南阿マダガスカルと別れ濠洲と別れて後段々亞細亞大陸の方へ引きよせられて、その結果北方にヒマラヤの連峯を構成するにいたつた。

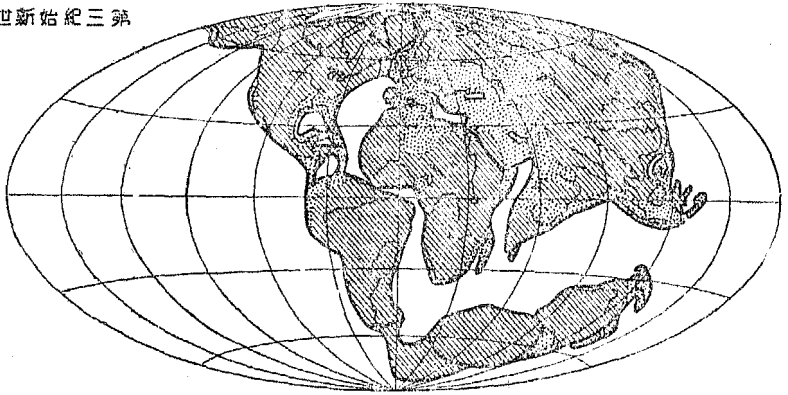
これ等の結果は大陸の一部が一方に於いて西へ移動すると同時に他方赤道の方向に壓縮せられて起つたものであつて、ヒマラヤ、アルプス、アトラス等の成立はこの後者に關聯して考へられ、アンデス其の他の海岸山脈は前者すなはち西方移動に起因する地殻の一部の抵抗によつて生じたものと考へられる。

石炭紀

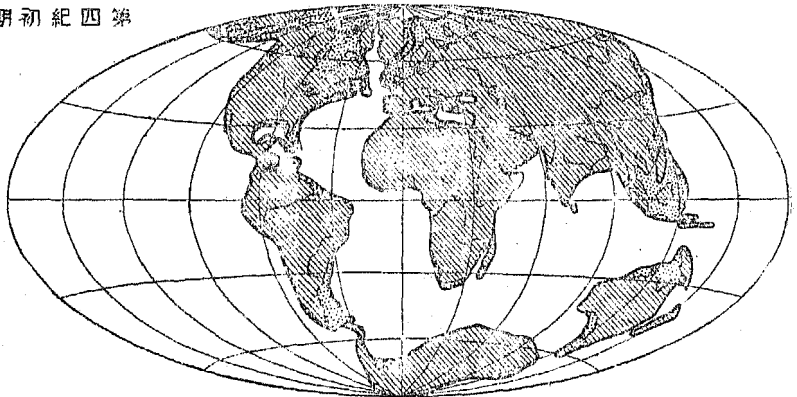


ウエゲネルの地殻移動説

第三紀新世



第四紀初期



三

八三

海深 □ 海淺 ▨ 陸大 ▩

而して右の如き結論の論據としてプエゲネルは地球物理学、地質學、古生物學及び生物學、古氣候學、測地學等の各方面から種々の材料を提出してゐる。こゝに一々細に入るを避けるが最も重きをなすは地質學及び古氣候學的の證左であらうと思はれる。地球物理学としては、これまでの理論より見て地殼移動が單にあり得る若しくは考へ得るといふに止るが、地質學的證據は可なり強い山脈が分離移動前に連續してゐた如く互に呼應せる事や（こゝに云ふ山脈とは單に現在の高處でなく、地質時代のそのの廣義にどる）火成岩及び水成岩の類似若しくは同一や地質構造の符合やはたとへ或る箇所にて相當な相異を示すとしても、之を全體として考へるときは地殼移動の説が地質學的に不合理でないやうに感せしめる。又グロンプテルス類植物化石より推論される石炭二疊紀の異常に巨大なる地域に亘れる氷期も地殼移動説により適當に説明される。何となれば見かけのこの巨大區域を移動前に戻して考へればそれは單に當時の南極

地方としての適當な地域に收められて、その巨大を説明するを要せぬであらう。是れ地殼移動説として大なる獲物でなければならぬ。更に過去にありし移動が現在も尙は繼續しつつあるやといふに測地學的觀測は之を肯定するやうである。すなはち地質時代の年數（假定をもつて現在の距離を割りて得たる年年の移動は實測したる一年の平均移動と大なる差はないと稱する。上の如く見て來ると地殼移動は理論上あり得る許りでなく實際あつたことであり、又現にあることであると論じて、プエゲネルの説はすくなくも形式的には完成した説といふべきである。

(Wegener, A. Die Entstehung der Kontinente und Ozeane, 3. Aufl. 1922)